

国立国語研究所学術情報リポジトリ

過去形の発見用法について：日本語と朝鮮語の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 優 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003308

過去形の発見用法について－日本語と朝鮮語の場合－

日本語教育センター第4研究室 井上 優

mainoue@kokken.go.jp

要 旨：日本語と朝鮮語の過去形「た」「-ess-」にはいずれも〈発見用法〉と呼ばれる用法があるが、その実質的な意味内容はかなり異なる。また、いずれの場合も、「た」「-ess-」は〈発話時以前〉を表すだけで、〈発見〉の意味は別のレベルで生ずる。この二つの点で、〈発見〉という概念はテンス・アスペクト形式の意味記述のための概念としては有効とはいえない。

キーワード：発見の「た」、発話時以前、観察場面の前景化、実情理解

1. 問題

日本語と朝鮮語の過去形「た」「-ess-」には、いずれも〈発見用法〉と呼ばれる用法がある。例えば、(1)(2)では、眼前に対象が「ある」ことを発見した文脈で過去形「あった」「iss-ess-ta」（あった）が用いられている。（朝鮮語の表記はYale式ローマ字表記による。）

(1) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…。あった。（発見の「た」）

(2) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つけた)

a! yeki iss-ess-ney. (直訳：あ、ここにあった。)

あ ここに あった 気づき (伊藤1990:43の例文に文脈を追加)

しかし、一口に発見用法といっても、その実質的な意味内容は言語によって異なる。例えば、(1)の文脈では「あった」は使えるが「iss-ess-ta」（あった）は使いにくい。

(3) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…。あった。

iss-ta./??iss-ess-ta.

ある あった

本稿では、「た」「-ess-」の発見用法が表す実質的な意味内容、ならびに日本語と朝鮮語のテンス・アスペクト体系における発見用法の位置づけについて考える。類似の意味を表す他言語の表現についても若干言及する。（なお、以下の内容は、井上(印刷中)、井上・生越(1997)でおこなった議論の一部に若干の修正を加えたものである。）

2. 発見の「た」－発話時直前の観察場面の前景化－

本節では、発見の「た」と同じメカニズムに支えられた現象について述べ、発見の「た」がその延長線上に位置づけられることを見る。

次の例を見られたい。

(4) a. 今日太郎からCDをもらった。ベートーヴェンの「第九」だ。今聞いているが、なかなかいい演奏だ。

b. 今日太郎からCDをもらった。ベートーヴェンの「第九」だった。今聞いているが、なかなかいい演奏だ。

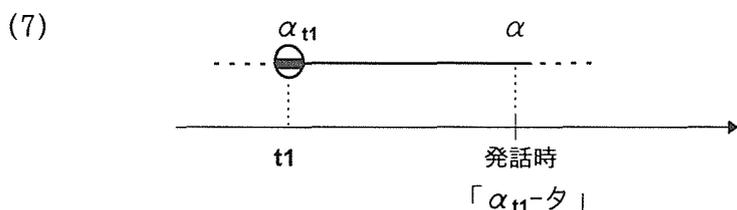
(4a)(4b)はともに自分が持っているCDの属性に言及する文であるが、意味が異なる。

まず、「た」を用いない(4a)は、

(5) 今日太郎からCDをもらった。(もらったCDは)ベートーヴェンの「第九」だ。
 のように、もらったCDの属性を述べるだけの文であり、「第九」のCDであることを知っている
 てもらった(例:太郎が持っている「第九」をゆずってほしいと頼んだ)場合でも自然に使える。
 一方、「た」を用いた(4b)は、

(6) 今日太郎からCDをもらった。(もらったCDを見たら)ベートーヴェンの「第九」
 だった。

のように、もらった時に観察された属性を述べる文であり、「もらったCDを見たら第九であ
 ることがわかった」場合でないといけない。つまり、発話時以前から知っている現在の状況を
 過去形で述べた場合は、発話時以前の観察場面で観察された部分だけを前景化して述べた文と
 して解釈されるのである。(4b)の発見的なニュアンスも観察場面の前景化により生ずる。)



(4)の「もらった」を「買った」にかえた(8)では「第九だった」は使いにくい。これも「買
 ったCDを見たら第九であることがわかった」という状況が考えにくいからである。

(8) 今日秋葉原でCDを買った。ベートーヴェンの「第九」だ(??だった)。今聞いて
 いるが、なかなかいい演奏だ。

(もちろん、「今日秋葉原でCDを買った。ベートーヴェンの「第九」だったが、家に帰る途中
 でなくしてしまった」のように、現在持っていないCDについて述べる場合は「た」が使える。)

次の例でも「た」の自然さは異なる。生まれたばかりの子供であれば、生まれた場面で観察
 された性別を述べることは自然だが、小学生の子供の場合は不自然だからである。

(9) (子供が生まれたという知らせを聞いて)

- a. それはよかった。で、男の子? 女の子?
- b. それはよかった。で、(見たら)男の子だった? 女の子だった?

(10) (10年ぶりに会った友人から「小学生の子供が一人いる」と言われて)

- a. あ、そう。男の子? 女の子?
- b. ??あ、そう。男の子だった? 女の子だった?

(11)は眼前に存在するものについて「ありました」を用いた例だが、この場合も「(調べた
 ら)ありました」という意味になる。

(11) (容疑者の自宅を捜索中に隠し金庫を発見した捜査員が、目の前にある金庫の中を調べ
 ながら本部に無線で連絡する。)

床下に隠し金庫がありました。今中を調べています。

(=(床下を調べたら)床下に隠し金庫がありました。)

やはり、過去形の使用によって、発話時以前の観察場面において観察された部分だけが眼前
 の状況とは別に前景化され、発見的なニュアンスが生じているのである。

過去形の使用による観察場面の前景化がどの程度許容されるかは言語によって異なるが(後
 述)、日本語ではその程度がきわめて高い。そして、その極端なケースが発見の「た」である。

(12) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…。あった。(=(ここを見たら)あった。)=(1)

(13) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つかった)

何だ、こんなところにあった。(= (よく見たら) こんなところにあった。)

(12)(13)は、(11)と同様、「(ここを見たら) あった」、「(よく見たら) こんなところにあった」という意味を表す。発見時と発話時がほとんど同時である点は異なるが、この場合もやはり、発話時以前(この場合発話時直前)の観察場面において観察された部分だけが眼前の状況とは別に前景化されて述べられているのである。

発見の「た」においても、「た」自体は〈発話時以前〉を表すだけであり、〈発見〉というムード的な意味は、過去形の使用によって発話時直前の観察場面が前景化された結果生ずる語用論的効果にすぎない。また、発見の「た」の存在を支えているのは、日本語の「過去形の使用による観察場面の前景化が容易である」という性質である。発見の「た」の存在は「た」の基本的な意味が〈発話時以前〉であることを否定する根拠にはならないのである。

ちなみに、中国語でも、「有」(ある)に〈新たな状況の出現〉を表す文末助詞「了」をつけた「有了」が「あった」に近い発見的な意味で用いられる。

(14) (書店で。以前来た時にはなかった目当ての本があるのが見えた)

あった。/ 有了。

ただし、「有了」が使えるのは、存在しないと思っていた、あるいは存在の有無がはっきりしなかった対象を発見した場合である。存在することがわかっている、所在位置だけが問題になっている対象を発見した場合は、「在這兒」(ここにある)が用いられる。

(15) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…。 あった。

在 這兒。/ ??有了。

ある ここ

3. 朝鮮語の「-ess-」の発見用法—発話時以前の実情の理解—

前述のように、日本語では過去形の使用による観察場面の前景化がきわめて容易である。これに対し、朝鮮語では、眼前に存在する状況は原則として現在の状況として述べられ、発話時以前の観察場面で観察された部分だけを前景化させて述べることは困難である。実際、先あげた(11)の文脈では過去形「iss-ess-ta」(あった)は使いにくい。

(16) (容疑者の自宅を捜索中に隠し金庫を発見した捜査員が、目の前にある金庫の中を調べながら本部に無線で連絡する。)

床下に隠し金庫がありました。 今中を調べています。

iss-supnita./??iss-ess-supnita.

あります ありました

当然、発見の「た」に相当する用法も朝鮮語の「-ess-」にはない。

(17) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…。 あった。(= (ここを見たら) あった。)

iss-ta./??iss-ess-ta.

ある あった

朝鮮語の「-ess-」の発見用法は「実情は…だった(の)か(知らなかった)」という意味の表現である。つまり、眼前の状況や相手の発言によってはじめて理解された発話時以前の実情を述べるために過去形が用いられるわけである。発見の「た」のように、発話時直前に観察された内容を前景化させて述べるのとはかなり事情が異なる。

- (18) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つかった)
 あ, ここにあったのか。(= (本当は) ここにあったのか。) cf.(13)
 a! yeki iss-ess-ney. (=2)
 あ ここに あった 気づき

- (19) («その電話番号, 間違ってますよ」と言われて)
 あ, やっぱりそうでしたか。(= やっぱり (実際のところは) そうでしたか。)
 a, yeksi kulayss-kwuna.
 あ やっぱり そうだった 詠嘆

単にそれまで知らなかった実情を述べるだけなら, 現在形を用いて「実情は…なのか(知らなかった)」と言えばよい。過去形を用いてわざわざ発話時以前の実情に言及する(すなわち, 発話時以前にさかのぼって認識を改める)のは, 「これまで誤解していた」「以前から疑問ではあったが本当のところはわからなかった」といった含みを持たせるためである。

- (20) 甲: 私は富山の生まれでしてね。
 乙: a. あ, そうなんですか。(はじめて聞きました。)
 b. あ, そうだったんですか。(これまで誤解していました。)
 c. あ, やっぱりそうだったんですか。(以前からの疑問が解決しました。)

「た」を用いた(20b)(20c)は, これまで別の出身地を考えていた, あるいは北陸あたりの出身とは思っていたが確信が持てなかったということを前提とした発話である。一方, 「た」を用いない(20a)では, 乙は単に甲の出身地を始めて知ったというだけであり, 乙の出身地について特に考えたことがないということもありうる。

発見の「た」と同様, 発話時以前の実情の理解を表す(18)(19)においても, 「た」「-ess-」は〈発話時以前〉を表すだけである。〈実情の理解〉というムード的な意味は, 日本語では文末形式「(の)か」, 朝鮮語では「ney」「kwuna」などの文末形式や文脈によって生ずる。

なお, フランス語の半過去形にも発見的な用法があるが, これも「-ess-」の発見用法と同じく, 眼前の状況によってはじめて理解された発話時以前の実情を述べる表現である。

- (21) Ah! tu étais là. (なんだ, いたのか) (春木1993:163)

4. まとめ

本稿では次の二点について述べた。1)「た」「-ess-」の発見用法の実質的な意味内容はかなり異なる。2)また, いずれの発見用法においても, 「た」「-ess-」は〈発話時以前〉を表すだけで, 発見的な意味は別のレベルで生ずる。〈発見〉という概念は, 個別言語の中でのテンス・アスペクト形式の用法分類には便利である。しかし, 先の二つの点で, テンス・アスペクト形式の意味を分析的に記述するための概念としては有効性に欠けるといわざるをえない。

引用文献

- 伊藤 英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1)-hayssta形について-」, 『朝鮮学報』第137輯, 朝鮮学会
 井上 優(印刷中)「現代日本語の「た」-主文末の「た」の意味について-」, 『「た」の言語学』, ひつじ書房
 井上 優・生越 直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因-日本語と朝鮮語の場合-」, 国立国語研究所編『日本語科学1』, 国書刊行会
 春木 仁孝(1992)「動詞のあらわすもの」, 『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社